

特集

『生涯学習の充実・推進とグループ・サークル活動』

論説

グループ活動はなぜ楽習か



西村美東士
(mito)

(昭和音楽大学短期
大学部助教授)

グループ活動がなぜ代表的な楽習の場になりうるのかという点について考えてみたい。自己決定や共感が失われつつある現代、
先日、短大一年

楽習と共習
学習は苦学をかみつぶしたような顔をして行うもの、教育は上の者が下の者に一方的に教養を育てるものというのは、誤った考え方ではないか。そんなことから、学習を、自分が楽しいから行う、すなわち「楽習」としてとらえ、教育を、教える人も教わる人から学ぶ、あるいは考えあう、学びあう、すなわち「共習」としてとらえようという考え方が出てきている。「楽しく習う」とも育ちたいというわけである。生涯学習も「学びたいことを、学びたい手段で学ぶ」という自主性、主体性の世界であるから、この楽習と共習の考え方がびつたり当てはまる。
なかでも、この世に多様に展開されているグループ活動においては、ほかでは得られないような出会いと気づきの学習機会があふれている。それは、本号に収録された活動事例を見るだけでも実感をつたえて読み取ることができるが、ここでは、ばくは、グ

図1 楽習の循環

自己受容を促す契機

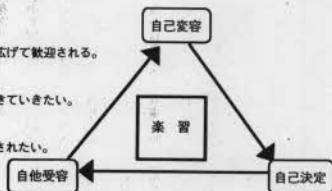
素のままの自分が両手を広げて歓迎される。

自己受容の理由

人生の風景を味わって生きていきたい。

自己決定の理由

どこまでも知りたい、癒されたい。



女子学生から次のような出席ペーパー(自由記述)が提出された。
自己決定自体、しても、しなくても、どちらでもよい。ただ、迷惑をかけた、かけられたりするのはいやだけれど。(思春期の少女の摂食障害のビデオを見て)私は彼女たちのことを可哀相とは思わない。本人はつらいとかいっているけれど、本人の願いどおり体重が激減しただけのこと。ビデオで彼女たちもいっていたとおり、「病気になるまで、かまってもいいから」からそうなった、つまり自己決定なのだから。
切ない話である。たしかに、自己決定は権利であって、しなければいけないというものでもないし、また、現代社会においては、自己決定しても通らない、かえって損をするなどということがあり、また多岐にわたる。だから自己決定するにむき直して周りに被ることをきかすよりは、迷惑をかけるようにおたがいが気づいて生きていることが大切、ということになる。しかし、一方、それは、おたがいが縮こまって生きているという現代の状況を生み出す結果にもつながっている。
生涯学習、ボランティア、市民・地域活動の三つの社会的活動を、ばくは自己決定の活動ととらえる(西村「癒しの生涯学習」学文社、97年)。一方、強制されたために、あるいは、本人に自己決定能力が欠けているために「自己決定」した行動については、これを自己決定とは呼ばないことにしている。なぜなら、たとえばやむを得ない状況になることを「自己決定」した人に向かっている「あなたに奴隷になったのも自己決定なのですよ」ということは不当だと思っただけ。これに対して、グループ活動は、当然、メンバー一人ひとりの自己決定活動である。そこにさやがさと深さが生ずる。
自己決定についても少し詳しくいうと、選択の自由だけでなく、撤退、無為を含めて三つの自由の前提のもと、過去や他人のせいによることなく、「やりたいから」「自分のために」自分の行動を決定することだとは考えられる。そういう者同士のあいだに自己とは異なる他者への共感も生まれるのだが、さらには、そうできない事情がある他者に対しても(じつは自分自身にも自己決定できない事情はいつまでもいくらでもあるはず)、同情ではなく、相手の枠組で相手を理解しようとする、つまり、共感すること、人の痛みを知る、ことが、とても重要だ。
自己決定や共感とは義務ではない。しかし、自己決定の人生を歩きたい、自己を信頼し、共感しあって生きていきたいという願いは禁欲できない潜在的願望であるはずだ。それを「しなくてもよいもの」と割り切ってしまうおとしめる時代の心理の奥底には、何か暗黒な敗北感が流れているように思える。
先日、ある青少年施設の運営会議で、

現代の時代の気分を「鬱」とする論議があった。鬱の時代のパブリック空間にはみんな飽きてしまっているのではないか。そういう時代には人々が求めている自己決定活動とは、大騒ぎできる華々しいイベントなどではなく、一人ひとりの「個の深み」(西村「生涯学習か・く・ろ・ん」学文社、91年)と静かに対面し、出会いの体験を味わうことのできる「癒しのサンマ」(時間・空間・仲間の三間)なのであろう。これがグループ活動における素習を創り出すのだ。

信頼と共感の活動

信頼は、信じて用いる信用とは違い、「欠点だらけでこめんね」、「いいよ」でも、これは頼むね、「ああ、いいよ」といって、信じて頼りあうことである。ぼくはこれを「さわやかな依存」と呼んでいる。共感とは、同じ枠組で同じように感じる同感とは違い、自分の枠組(判断基準)で相手を推し測ることなく、自分とは異なる相手の気持ちで相手を理解することである。実感が疎外され、各人の物差しが画一化(同質化)されがちな現代においては、かなり困難な課題といえるが、これにより異質のひとと土の水平な、癒される、自立のネットワークが実現する。

その点、グループ活動のような生涯学習時代における自己決定活動は、「自分のためにやっています」という人たちの実感あふれる癒しと成長の出会いである。そこでは、人々のあいた

に基本的信頼と共感的理解が根づいてゆく。そのことは、社会的にいえば、上下同質競争社会から水平異質共生社会への望ましい転換を促す先駆的、実出的な要因になる。

そのためには、グループ活動は支持的風土のネットワークであることが大切である。

生涯学習社会以前の学校歴偏重の上下競争社会では、一人ひとりが仲間からいつ足を引かれるかわからないから、仲間にあわせたふり(仮面)をしていなければならないという「防衛

的風土」に満ちている。このみじめな集団風土は、個々人の内面としてのピアコンセプトによって支えられている。ピアとは「なにかよし仲間」のようなものである。仲間を大切にするということはよいことなのだが、それは自分を押さえて仲間と無理に同じようになろうとする意識にもつながりがちなのである。現にこの話をした大学の授業で、「友達から愛と思われたらもう終りだ」と出席ペーパーでばくちに怒りをぶつけるように書いてきた女子学生がいる。現代社会のなかで、そこまで縮こまって生きている人たちがいるのだ。

ピアコンセプトは、ヒエラルキー(階層構造)の支配・服従関係から逃げ出したいという願望から発しているのだが、ピアだけでは残念ながら、癒され、自分らしく生きることのできる関係にはならない。かえって、現在のたの人間関係(ヒエラルキー)を下から支えたり、内部でミニ・ヒエラルキーをつくらなければならない結果に陥ってしまう。ピアコンセプトはネットワークへの情動的機軸の一つであるとは考えられるが、ネットワークにおいては、ヒエラルキーへのみずからの忠誠心を喚ぶとともに、そのような自己の内なるピア意識をも意識的・理性的に乗り越えなければならないのである。

もちろん、ここでのネットワークは冷たいこころのものではない。むしろ、ほんとうの意味での信頼の関係といえ

る。これを支持的風土ということが出来る。それは、みせかけの同調をすることではない。仲間と調わない場合もそれを安心して示すことができる。人間はもとより無知であり、非力であるのだから、それを自覚してもなおかつそれを受容してこそ(無知と非力の自覚)、自己への信頼と共感が生まれるのだ。ネットワーク型のグループ活動は大きい癒しのサンマ、素習のサンマになりうるのである。

注1:「サンマ」のあり方については、自著「癒しの生涯学習ネットワークのあじわい方とはぐくみ方」(学文社、一九九七年)を見ていただけたと

うれしい。

図2 求められる3つのちから

相互否定・同質上下競争の魔のトライアングルから、
相互承認・異質水平共生の癒しのネットワークへ

同一化演技
上下競争
自他否定
敗北主義

癒しのサンマ
共感的理解
水平共生
自他受容
自立進歩

にしむらみとし

1953年生まれ。東京都社会教育主事、国立社会教育研修所専門職員を経て、1990年から昭和音楽大学短期大学部助教授。担当は社会教育主事課程。

学生や社会教育職員は、mitoさん、mitoちゃんと呼ぶ。

〈著書〉

・『生涯学習か・く・ろ・ん-主体・情報・迷路を遊ぶ-』1991年

・『こ・こ・ろ生涯学習-いばりたない人、いりません-』1993年

・『癒しの生涯学習-ネットワークのあじわい方とはぐくみ方-』1997年

(ともに学文社)